

「根が聖なるものであるならば、枝もそうです」

2018年10月15日

ローマの信徒への手紙 11章 11節～16節 では、尋ねよう。ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか。決してそうではない。かえって、彼らの罪によって異邦人に救いがもたらされる結果になりましたが、それは、彼らにねたみを起こさせるためだったのです。彼らの罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのであれば、まして彼らが皆救いにあずかるとすれば、どんなにかすばらしいことでしょう。では、あなたがた異邦人に言います。わたしは異邦人のための使徒であるので、自分の務めを光栄に思います。何とかして自分の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです。もし彼らの捨てられることが、世界の和解となるならば、彼らが受け入れられることは、死者の中からの命でなくて何でしょう。麦の初穂が聖なるものであれば、練り粉全体もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです。

パウロは、イスラエル人がキリストの福音を受け入れないのは、申命記 29章 3節の「主はしかし、今日まで、それを悟る心、見る目、聞く耳をあなたたちにお与えにならなかった」という言葉を引用し、神が彼らに悟る心、見る目、聞く耳を与えなかったからだと述べた。そこで、「では、尋ねよう。ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか」、再起不能、破滅なのかという問いが起こる。それに対し、「決してそうではない」と激しく否定する。そして、イスラエル人が福音を受け入れない意味を語る。イスラエル人の不信仰の罪によって、異邦人に救いがもたらされる結果になった。異邦人たちが諸宗教の戒律や犠牲から解放され、自由にのびのびと福音を生きている様子を見て、イスラエル人に妬みを起こさせる神の計らいであった。イスラエル人の罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのであれば、良いことではないか。まして、両者が共に救いに与ることができれば、こんな素晴らしいことはないだろう。パウロは、イスラエル人が福音を信じるようになることを熱望している。

イスラエル人と異邦人を対立関係で捉えているが、パウロは対立的に捉えることが好みだったのではない。窮乏したエルサレム教会の支援のため、パウロは異邦人諸教会に支援を依頼している。北にある貧しいマケドニア州の教会と豊かなコリント教会を擁する南のアカイヤ州を対立させ、恥をかかないようにと競争させて募金活動を進めている。また、パウロは捕らえられ、最高法院で尋問を受けた時、復活を信じるファリサイ派と信じないサドカイ派を激しい対立状態に導き、ファリサイ派の援護を受けるように、巧みに弁明している。対立させて、福音的な益を得ようとするのがパウロの手段のようだ。

パウロは「では、あなたがた異邦人に言います」と言い、「わたしは異邦人のための使徒であるので、自分の務めを光栄に思います。何とかして自分の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです」と、異邦人伝道者であることを誇りながら、同胞イスラエル人の救いを願っていると語る。神の民イスラエル人が不信の罪によって捨てられることによって、世界に福音が伝わり、世界の和解になるならば、彼らは死者の中からの命ではないか。捨て去られても、他者を生かすなら、それは復活の命でなくて、何であろう。

「麦の初穂が聖なるものであれば、練り粉全体もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです。」パウロは、根はイスラエルであり、その根が聖であれば、枝も聖であると、あくまで、イスラエルの聖なる根を主張し、同胞の信仰に希望を託している。